第 68 号
（年４回発行）
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

2017（平成29）年度 入学式挙行

４月５日（水）、２０１７（平成29）年度弘前学院大学並びに大学院の入学式を行いました。多くのご来賓の方々や保護者の皆様のご参列をいただき、晴れやかな中にも厳粛な雰囲気に包まれて、文学部第47回、社会福祉学部第19回、看護学部第13回、大学院社会福祉学研究科修士課程第15回および文学研究科修士課程第13回、総勢１８８名の学生が入学されました。（学長の式辞はＨＰに掲載しております。）

宣誓者柴田彩菜さんと吉岡学長

中長期目標実施計画の確立・実践に向けて

学校法人弘前学院
理事長・学院長　阿保　邦弘

三　「実施計画策定にあたって（その一）」

『本学の置かれている立場』

国の主導する教育改革は、予想以上に加速している。今回の教育改革はいずれ挫折するなどと、戯言を言っている暇はない。

全国の各大学は、改革に乗り遅れないようにと必死である。しかし、奮戦むなしく廃校となった大学の出現は、存続することの難しい現状を教えている。

二〇一六年には、女子大の伝統校であった「T女学館大学」が廃校となった。

小中高からの一貫した女子教育機関として、一三〇年近くの歴史を有する。

今春の中学受験の実質倍率は三倍近くあり、志願者の倍率は12倍を越え（一五〇〇人以上の志願者）、名門女子校としてのプライドを保っている。

募集に強い附属校を抱えたブランド大学でも、消滅から逃れられない事実は衝撃的である。

九州福岡県にある「F国際大学」も、二〇一八年には廃校を予定している。

福岡市からは少し離れているが、すぐ近くに日本有数の観光地大宰府天満宮を控え、九州の文化的拠点である九州国立博物館を間近に臨む地に立っている。

入学者数において、二〇一五年度入試の定員充足率は本学と同程度であるにもかかわらず、早々に廃校を決定した。

何れの大学も、教育改革に充分に取り組む余裕もないまま消えていく運命を辿ったが、直面した現実は決して他人事とは思えない。

中でもF国際大学は、国内外大学との協定数（国内３大学、海外16大学）、地域との提携事業数や交流活動歴において、本学より数値は上回っている。

もう一つ大学を紹介しておく。本州の最南端にある大学だが地方大学の例にもれず学生募集に苦しむ時期が続いた。

学長自身が直接改革先進大学を視察し（二〇一一年度）、学生数回復のアドバイスを乞うた。

しかし、「今、大学をたためば誰にも迷惑がかからない」と言われ意気消沈の思いで帰った。

その後は、学長自らが改革の先頭に立って苦闘の道を歩み、（５年後定員確保）、現在も改革のスピードを緩めていない。

さて、今一度本学の置かれている立場を振り返ってみよう。

弘前学院は一三〇年以上にわたって、地域に根ざしたキリスト教に基づく高等教育機関としての役割を果たしてきた。

しかし、県内での競合学部の乱立や時代要請の変化に伴い、定員の確保に今一歩である。

また、青森県は周辺県と比較しても大学の過密状態にあるが、この時期になって各大学が一斉に改革に着手し始めた。

特に、青森市内の私大や短大では、学内改革や地域との連携を打ち出し、それを学生募集の切り札として使いだしている。

さらに、平成32年度からは急激に18歳人口が減少する。それに追い打ちをかけるように数年前から都内や仙台・札幌周辺の大学は、本県の学生獲得を目的に攻勢をかけている。

今この時点に至っても、危機的状況に気づくことなく泰平の夢を貪っているようでは、本学の未来への展望を開くことは到底不可能である。

（以下次号）

新入生の夢と希望「私の夢」

文学部
英語・英米文学科１年
田澤　周平

私はある一つの夢をもってこの弘前学院大学に入学してきました。そのある夢とは、英語の教師になるという夢です。

私は小学校の頃、ＡＬＴの先生に英語の授業の時に、英単語の発音を褒められたのがきっかけとなり、英語が好きになりました。そしていつの日か、その大好きな英語をみんなに教えたいなと思うようになり、教師になりたいという夢を持ちました。しかし、大学に入学して、いろんな人と出会い、そしてバイトも始めました。バイトを始めてから新しい夢も見つかりました。正直な話、英語の教師になるという夢もあきらめきれませんし、もう一つの夢もあきらめきれません。しかし、こんな夢が豊富な私ですが、そのたくさんある夢を叶えるために毎日勉強に励んでいます。この大学は、学生一人一人に合わせた学習、そして学生の〝なりたい〟を全力で応援していてくれる大学だと思っています。私の他にも共に夢を叶えるために日々勉強にはげんでいる良き友がいます。お互いに将来の夢を語り合ったりして、本当に学生生活毎日が充実しています。大学を卒業したからといって必ずしも自分の理想としている職業につけないかもしれません。しかし、今、この時を頑張ることによって将来なりたい姿にきっとなれるはずだと私は信じています。将来はまだ決まっていません。これからの頑張りが白紙のページを埋めていき、そしてその行き着く先にはきっと自分の望む理想の未来が、ハッピーエンドが待っているのだと思います。このヒロガクで自分の〝なりたい〟を叶えたいと思います。

文学部
日本語・日本文学科１年
長谷川美咲

私の夢は、中学校又は高校の国語教師になることだ。大学に入り、教師になるための履修登録をしてより一層身が引き締まった。強い心を持っているとは胸を張って言えない私が、何とか頑張っていけるのは何故なのか、ふと考えてみる。

春から一人暮らしを始め、今まで親に頼ってばかりだった私は、普通に生活するということの大変さを感じている。お弁当一つ作ることができただけでも自分を褒めてしまうくらいに。親への感謝の気持ちと、少しずつではあるが自立できていることの喜びが一番の原動力だ。日々努力をして立派になり、早く親に恩返しをしたい。他にも沢山、私を支えてくれる存在がある。趣味である音楽鑑賞をするひと時・友人や先輩と関わっていくこと。

恵まれた環境で生きていける喜びが、夢へと私の気持ちを向かわせてくれるのだ。周りからの助けを貰いつつ、時には一人でも困難を乗り越え、あわよくば誰かの力になれる人間になりたい。

夢である教師になりたいと思ったきっかけは、中学・高校で素晴らしい先生方に出会えたことだった。国語は小学生の頃から私にとって何か特別で大好きな教科ではあったが、年々様々な内容を学ぶことに、さらに興味が湧いた。文章を読み、論理的に考えたり心情を理解すること、文法などを覚え世界を広げることの楽しさを、将来自分も生徒達に伝えたい。絶対に夢を叶えるために、日々目の前の物事と向き合い、努力を惜しまず前へ進みたい。

社会福祉学部
社会福祉学科１年
須藤　咲季

私の夢は、国家資格である社会福祉士と精神保健福祉士の両方を取得し、地域社会や人々を支え、豊かな暮らしをサポートするソーシャルワーカーになることだ。

私は、高校生の時、ボランティア部に所属して子ども行事の補助、盲導犬の募金活動、障がいを抱えている子どもや大人の方々とイベントを通して数多く関わってきた。また、インターンシップでは、認知症を抱える高齢者の方々が入居されているグループホームを訪問し、介護の業務内容や利用者の方々とコミュニケーションを学んだ。この経験から、介護の知識をさらに深めようと介護初任者研修の資格を取得し、実技と知識の基本を学んだ。多くの活動を通して様々な事を学び、どの経験も私を大きく成長させた。

社会福祉学部では、将来に直結する高度な専門分野の勉強ができる。多くの講義や演習、実習は私の心を熱くさせるものばかりである。高校では、体験を通した学びが多かったが、入学して感じたことは、経験だけではなく、知識を踏まえた体験の大切さである。

まずは、日頃の講義を集中して聴き、自分の人生の糧としていきたい。その他に、友達や先生、地域の方々の意見も日頃から聴き入れ、それに対して自分の意見、疑問をもつことを習慣としたい。今は、新しい環境や仲間に慣れないが、徐々に慣れていき、充実した大学生活を歩みたいと考えている。国家資格とコミュニケーション能力を身につけることを大学生活の最大の目標とし、夢をふくらませ頑張りたい。

看護学部
看護学科１年
佐藤　陽平

私は世界中の助けを必要としている人の希望になるのが私の夢だ。

大学生の将来の夢にしては、大雑把で具体的ではない夢だと自分でもおもってしまう。しかし、自分の描いたことを実現するときにこの大雑把な部分が色々な方向へ導いてくれると思う。

看護学科に入って、看護師になりたい、保健師になりたいという目標は誰でも持っているはずで、もちろん私もその目標はある。私はさらにそこから一歩踏み出して、世界を舞台にして仕事をしていきたい。

なぜ世界で仕事をしたいのか?そう自分で考えることがある。そう考えた時に思い浮かぶ一番のきっかけは、小学校の時にあった。ユニセフの募金だ。１００円で救える命があるのだと知り、小学生だった私は、「日本の人全員から１００円集めれば、たくさんの命が助かるんじゃないの?」と思った。そして、この考えが元となっていまの夢につながった。

なので、私の目標とするのは、最終的には日本で磨いた看護の知識、技術を使って、発展途上国や、満足に医療を受けられない子供がたくさんいる国に行き、その人達の希望になることが今の目標だ。

パネルデスカッションで学長が講演

弘前学院大学　学長　吉岡　利忠

2017（平成29）年6月9日～10日に仙台市にある東北学院大学でキリスト教学校教育同盟第105回定時総会が開催された。ロンドンにある立教英国学院（創立45年）が新規にこの同盟に加わり計104校となった。海外からの参入は同盟として初めてのことである。礼拝、議事案件審議に続き、特別プログラム・オルガン演奏及びパネルデスカッション「教育同盟への提案―医療・病院からの視点―」開催された。パネルデスカッションは、本同盟理事長梅津順一（青山学院院長）先生の司会で始まり、吉岡学長は「職業教育と人間教育―医学の立場から―」と題して講演した。梅津先生の教会と学校と病院はすなわち救いと教育と癒しとの間で多くの共通点があるということを受けて、本学3学部で導入している、精神保健学、精神医学、ヘルスサイエンス論、医療概論、生命の科学、こころと疲労、老化と生体、コミュニケーションとナラティブなどの他大学ではあまり目にしない科目を紹介した。また、吉岡学長の尊敬する先人達の「医学はサイエンスであり、かつアートである」、「神は愛、神に代わりて愛を与えるもの、それすなわち医である」の言葉を紹介し、「医の心」の根底には人を愛する気持ち、すなわち人間愛、極端に言えば「愛」でありキリスト教精神そのものであり、本学の教育の姿勢に流れているとした。このパネルデスカッションには戸苅創医師（金城学院理事長・学院長）及び十時忠秀医師（福岡女子学理事長）の二人が講演し、それぞれの学校の歴史やキリスト教教育との現状を紹介していた。

研究紹介㊲

精神保健福祉士の専門職性の研究

社会福祉学部　教授　葛西　久志

様々な研究（児童生徒の精神保健福祉、精神障害者のアウトリーチ、精神障害者家族のリカバリー支援など）に取り組む中で、大学教員になってから継続して取り組んでいる核となる研究が『精神保健福祉士の専門職性』である。

精神保健福祉士は、一人ひとりの精神障害者や家族が安心して暮すことができるように医療機関をはじめ、障害福祉サービス事業所等々でソーシャルワークを実践してきた。

また、精神保健福祉士は、精神障害者に対する社会の差別や偏見が多くある中、共に悩み、共に迷い、共にゆらぐ状況を共有しながら、そのかかわりの中で精神障害者本人が生活者として主体的に自分の人生を創造していけるように支援をしてきた。そして、現在、精神保健福祉士を取り巻く様々な法制度も年毎に変化し、社会から求められるニーズも多様化しながら、その役割はますます拡大してきている。

そうした状況下、精神保健福祉士は、専門職（profession）として認められるべく、努力がなされているのだが、いっこうに社会的地位は確立されていないように思えるのである。一体、何がその要因として挙げられるのだろうか、というのが本研究の始まりであった。

そこで、青森県を中心に岩手県、秋田県の北東北地区の医療機関や障害福祉サービス事業所等に勤務する精神保健福祉士等を対象に「精神保健福祉士の専門職性」に関する意識調査を実施した。

その結果、専門職性の条件から①名称独占の課題、②教育訓練の見直しの必要性、③自律性の低さ、④公共の利益の向上、⑤専門職団体の活性化と倫理綱領の遵守、⑥法的配置基準による必置制などの課題や改善すべき点が明らかになった。

結論としては、現時点での精神保健福祉士は、専門職性の構成要件を獲得している動態的過程であり、専門職化（professionalization）の状態であることがわかった。

今後は、専門職性の条件の各課題・問題を改善することによって、専門職（profession）として認められ社会的地位を確立するものと考えられる。

談話室

「共に生きる社会とは」

社会福祉学部　講師　佐藤　眞一

私の心に残る話の一つとして、ある畜産家の講演で聞いた「牛飼いのこころ」がある。その内容は、「牛飼いを生業にする人たちが抱く気持ち」についてであり、次のように要約できる。①一つの群れの乳牛たちは、乳量の順位が明らかになる。②一番順位の低い牛を乳のよく出る新たな牛に入れ替えたい気持ちが生まれる。③入れ替後も牛飼いは満足できない。何故なら、牛飼いは新たな群れで又乳量の一番低い牛を見つけ出し、ますます入れ替えに心が奪われる。

さて、話は変わるが、昨年4月1日より「障害者差別解消法」が施行された。この法律は、障害による差別を解消し、誰もが分け隔てなく共生する社会を実現することを目的として制定され、個々のニーズに合った合理的配慮の提供を求めることによって障害による差別を解消しようとするものである。

実は、この障害者差別解消法に関連して、前述した「牛飼いのこころ」では、もう一つ大事なことを教わっていたことを思い出す。それは、いかに牛を入れ替えても、群れ全体の乳量に大きな増加は見られない場合が多いということ。そして、換えられた牛は乳量は一番少なかったが、その群れの一員として共に生きることで何らかの役割を果たし、群れ全体の乳量保持に大きく貢献していた現実に牛飼いが気づかされる、ということである。

障害のあるなしにかかわらず「共に生きる社会」の実現を目指すためには、法令の遵守以前に、「人は地域社会において、それぞれができる役割をお互いに担い合うことで共に生きられる」ことに気づくことが重要だ。この障害者差別解消法が、あらゆる人にとってお互いの違いを認め合い、共に生きていく社会の第一歩となることを願う。

かつて、「牛飼いのこころ」で学んだように、「共に生きる」という信念の大切さを今更ながらに感じている。

父母と教職員の会 総会・懇談会報告と年間行事のお知らせ

五月二十七日（土）、本学にて二〇一七年度父母と教職員の会総会・懇談会が催されました。総会では、佐藤和博会長が議長となり、以下の議案について話し合われました。

○第一号議案
二〇一六（平成二十八）年度活動報告及び収支決算報告について

○第二号議案
二〇一七（平成二十九）年度活動計画（案）及び収支予算（案）について

○第三号議案
役員改選について

なお、役員については次のとおり決定されております。

会長　佐藤　和博（本学教授）
副会長　三上　恒寛（新任）
監事　塚本　正仁（新任）
監事　佐々木正晴（本学教授）
顧問　吉岡　利忠（学長）

総会に続いて行われた懇談会では、学生生活や履修及び単位修得、就職状況等について説明しました。懇談会終了後、保護者からの個別相談に教職員が対応する姿や保護者同士が親しく懇談する姿もみられ、会員同士が親睦を深める機会となりました。

今年度の父母と教職員の会の年間行事は以下の通りです。

○五月二十五日（木）
学内常任委員会
○五月二十七日（土）
役員会、総会・懇談会
○七月二十九日（土）
父母・教職員研修会
「親のための就職講座」
○八月二十四日（木）
職員研修会（校内研修）
○八月三十一～九月一日
（木・金）
職員研修会（校外研修）
○十月八日（日）
地区別父母懇談会（弘前）
※学祭と同日開催
○十月十四日（土）
地区別父母懇談会（青森）
○十月二十一日（土）
地区別父母懇談会（盛岡）
※七月の父母・教職員研修会と十月の地区別父母懇談会については、別途ご案内をお送りする予定です。

人事異動

◆新任紹介

看護学部　准教授　塚本三枝子
講師　阿部　智美
講師　牧　千亜紀
助手　齋藤　玲香

◆退職

社会福祉学部
教授　齋藤　繁
看護学部
教授　櫛引美代子
教授　阿部テル子
教授　外川ゆり子
准教授　葛西智賀子
准教授　工藤千賀子
准教授　工藤　優子
助教　渡部菜穂子
助手　金子　夏弥
助手　後藤芙優子
助手　對馬　牧子
事務職員
図書館司書　佐藤　まり
学務課　三上ノリ子

◆異動

図書館へ（就職課より）
百瀬　恵子
看護学部事務へ（秘書室より）
今　優希奈

平成二十九年度学部・学科長及び主任紹介

◆文学部

文学部長　教授　井上　諭一
英語・英米文学科長
教授　佐藤　和博
日本語・日本文学科長
教授　鎌田　学
学務主任　准教授　入江　英弥
学生主任　准教授　生島　美和

◆社会福祉学部

社会福祉学部長
教授　石田　和男
社会福祉学科長
准教授　高橋　和幸
学務主任　講師　立花　茂樹
学生主任　教授　西東　克介

◆看護学部

看護学部長
教授　吉岡　利忠
看護学科長
教授　柳澤　尚代
学務主任　准教授　幸山　靖子
学生主任　教授　千葉　正司
文学研究科長
教授　畠山　篤
社会福祉学研究科長
教授　石田　和男

二〇一七年度特待生授与者

二〇一七（平成二九）年度の弘前学院大学特待生に、五月三十日（火）十二時より賞状の授与が行われた。今年度の授与者は次の方々です。

◆文学部

二年　貝森隼人
三年　兜森由稀
四年　笹花哲平

◆社会福祉学部

二年　安保佑香
三年　赤平奈南
四年　盛　由希

◆看護学部

二年　小浜海都
三年　大森未来
四年　藤田隼輔

＊一年生については、前期成績発表後の十月に特待生に授与予定です。

社会福祉学部 学内就職セミナー(5月13日実施)報告

社会福祉学部　社会福祉学科4年　大山　龍成

先ず、セミナーに参加した施設はこれまでに自分が認識していた施設もあったがまったく初めての施設もあった。そのため現在就活中の私にとっては福祉施設を考えるうえで大変役立ちました。

ただし、当初の私はあまり福祉施設の就職を考えておりませんでした。せいぜいマイナビやリクナビに掲載されている施設の概要を見るくらいでした。それが今回セミナーに参加し5ヶ所の施設の説明を聞き就職試験を受けてみたい施設が見つかりました。この5ヶ所の施設について簡単に報告をします。

一、宏仁会…ここは、高齢者の介護を専門に行っており、女性の介護士が多い職場です。そのため結婚・出産・育児などが出来る環境作りがなされており、女性の方にお薦めの職場です。

二、報徳会…ここは、私が一番志望している施設であり、相談員や介護士を中心に募集しております。なお在学中に国家資格を取得できなくても在職中に研修等を通じて取得可能です。

三、音羽会…介護を専門としておりますが、リハビリ・居宅介護等も行っております。また、季節毎にイベントがあり利用者の方々と楽しんで介護をしている印象があります。

四、柏友会…介護・保育・障害事業を専門に展開し児童から高齢者まで幅広い年齢層を対象に支援を行っております。

五、弘前豊徳会…介護老人を専門にし、クリニックを併設しているのが特徴です。また、研修では、高卒無資格からのキャリアアップがあり、高卒でも安心して働ける施設であります。

以上5つの施設の話を聞き、自分的には意中の施設を見いだしているが今後さらに施設研究を深め目的の施設合格へ向けて邁進して行きたいと思います。

看護学部学内就職セミナー・病院合同説明会(5月20日実施)報告

看護学部　看護学科3年　大森　未来

学年が上がってから気づいたことがあります。それは、看護学師を目指して日々勉強をしているけれど、どこで働きたいのか自分の考えが定まっておらず、今まで就職に関する情報を得られていなかったということです。最終学年になるまで一年をきっているというのに、就職に関する情報に乏しい状態のままではさすがにまずいと思い、一度の機会に複数の病院から説明を聞くことのできる就職セミナーに参加することを決めました。そして今回、わたしは五つの病院から話を聞くことができました。教育体制、資格取得・進学のサポート体制、給与などの説明を受け、それぞれの病院の基本的な情報を知ることができた他、病院によっては急性期医療を主としている病院などそらぞれの病院の特徴も知ることができました。そこで、自分が興味を持っているのは急性期なのか慢性期なのか、小児なのか成人なのか、何科で働きたいのかなど、そこから考えて病院を選ぶのも一つの方法だとアドバイスを頂きました。私はまだ進みたい領域が明確ではないので、後期から本格的に始まる臨地実習を通して、自分の適性に合う領域を見つけていきたいと思いました。

就職セミナーに参加したことで、就職に対しての意識が高まりました。三年生のうちにインターンシップに行くなどして就職に向けて動き始めたいです。

ウィスコンシン大学・私の体験記

文学部　英語・英米文学科4年　鈴木　絢子

私の経験を、学習面とプライベート面からお話しします。まず学習面では、授業は月曜日から木曜日までの1日4コマずつありました。授業はそれぞれスピーキング、リーディング、ライティング、リスニングの4つに分かれていて、1コマが各55分授業なので、日本の大学の各90分授業と比べたらとても短く、短時間集中型で私にとってはベストな環境でした。宿題に関しては、毎日必ずありました。それぞれの授業から出されるのは気合いで乗り切りましょう!

プライベート面では、友達と一緒にモールに行って買い物をしたり、学内や地域のイベントに参加したり、ジムで体を動かしたりなどさまざまでした。外に出かけなくても、大学内・寮内でのイベントが豊富にあるため、敷地内だけでも十分に充実して生活できます。私は、感謝祭という休暇を使ってニューヨークに行ってきました。ニューヨークでは多国籍の方達が多くいるため、刺激がたくさんあり飽きることがありませんでした。ホストファミリーの家に4日ほど滞在し、アメリカの生活スタイルを体験することもできました。帰国する前には、シカゴへ旅行に行きました。シカゴに行くなら、シカゴピザは絶対に食べてきてください!

びっくりしますよ!留学に行こうと考えてる人がいたら迷わず行きましょう!

留学は大学生のうちにしか出来ないことだと思います。最初は自分の英語力に自信がないなどの理由で、悩んだり不安になって立ち止まると思います。しかし、やって失敗するよりは、やらないで後悔する方がずっと嫌だと思いませんか?不安でもチャレンジすれば、その分ちゃんと自信となって返ってきますし、今の自分に出来ること・出来ないことがわかり、自分のことについて改めて知る機会にもなります。失敗から得た向上心から新たな目標、夢といったものが生まれ、価値観、世界観もガラッと変わります。英語を上達させたい、異文化に興味がある、夢を見つけたい、行く理由は何でもいいと思います。英語に興味がない人でも刺激を求めに行ってみるのもいいと思います!

人生で一番濃い四か月

文学部　英語・英米文学科4年　水木奈美子

ウィスコンシン・ラクロス大学に留学した四か月は、私にとってかけがえのない思い出になりました。私は今回の留学が初めてのアメリカで、小さい頃から住んでみたいという憧れがこの留学で実現することになりました。想像していた以上にアメリカでの生活は全てが刺激的で、あの四か月はあっという間に過ぎていったことを今でも覚えています。

最初の一か月はアメリカの生活に慣れることに精一杯で、ルームメイトのアメリカ人とも上手く会話することができませんでした。授業も日本の大学でやる形とは全く違うもので、間違っても喋るということが大切でした。アメリカに行ったら絶対に太って帰ると思っていましたが、私の場合、授業についていくのに必死で最終的に痩せて日本に帰ることとなりました。宿題も毎日渡され、夜遅くまで友達とやる平日がほとんどでした。

アメリカの生活も慣れ、ルームメイトとも仲良く会話できるようになった頃に彼女の優しさに気付かされました。彼女は自分の宿題があるにもかかわらず、私の宿題の質問にいつも優しく丁寧に教えてくれました。お互いの趣味も合い、私はミュージカル映画が好きで二人でよく歌ったりもしました。彼女は編み物や裁縫が得意で、私のために水色のマフラーを編んでくれました。センクスギビングデイには、彼女の家に招待され、たくさんの動物や盛大な料理で迎えてくれました。私はこの留学で彼女と出会えて本当によかったと思っています。一つ一つの思い出が頭の中をよぎるほど、私はこの留学を決して忘れることはないでしょう。そしてこのような経験ができたのも両親と先生とおかげであると考えます。この留学で学んだことを活かし、これからの人生を悔いのないものとし、将来は留学で仲良くなった人たちに会いに行きたいです。

学祭実行委員会始動

学祭実行委員会

今年度の学祭は10月8日(日)9日(月)に開催されます。テーマは「TAKE A NEW STEP!」です。これには、昨年創立130周年式典が開催され、学祭を1年休みました。そこで「今年の学祭は二年分のエネルギーを込めて新しい一歩を踏み出そう!」という意気込みが込められています。また、学祭実行委員の大半を占めている二年生と一年生は今回が初めての学祭になるので、これまでの学祭のイメージを新しく塗り替えるという意味も込めて現在、学際準備活動を行っています。

今年度、予定しているイベントは、これまでも開催していた「カラオケ大会」・「お笑いライブ」・「軽音ライブ」・「吹奏楽による演奏」に加え、新たに「ビンゴ大会」・「ミス・ミスターコンテスト」・「フリーマーケット」などを計画しています。毎年の定番ともいえる「カラオケ大会」や「軽音ライブ」、また、一昨年は「バイきんぐ」の二人にゲストとして来ていただいた「お笑いライブ」など、盛り上がるイベントばかりですが、学祭実行委員おすすめの目玉イベントは「ミス・ミスターコンテスト」です。

「ミス・ミスターコンテスト」はその名の通り、弘学一の美女「ミス弘学」と弘学一のイケメン「ミスター弘学」を決めるというものです。ただ、出場者の中では必ずしも「男子ならミスター」「女子ならミス」に出場するのではなく、女装や男装をして出場したいという方がいると思います。そのため、男装や女装をしてナンバーワンを争っていただく「男装・女装コンテスト」も企画しています。両方とも参加者募集中なので、少しでも気になる方はぜひご参加ください。

また、イベントだけではなく、教員と学生の共同企画を各学部ごとに行います。もちろん文科系サークルの日頃の活動発表の企画もあります。こちらは企画案を現在募集中です。自薦他薦ともにぜひお寄せください。

去年の休みをバネとして、これまでにない学祭として大いに盛り上げていくというテーマの通りにするためには、みなさんの協力が不可欠です。弘学全体で新しい学祭を作っていきましょう。

ゴールデンウィーク宣教師館公開、賑やかに

特別公開プロジェクトチーム

４月29日～５月２日の晴天に恵まれた４日間、ＧＷ期間中では初めて、本学キャンパス内の国指定重要文化財「弘前学院外人宣教師館」および本学礼拝堂の特別公開を行いました。この機会に、宣教師館内は資料館として見学してもらえるよう展示や解説パネルを設置するほか、学生による解説ガイドも実施しました。

また29、30日は、正門前広場において社会福祉学部学生との共同による社会福祉施設の飲食・販売ブースを設置しました。来場者にはオープンカフェ風につくった広場で、おなかも満たしながらゆったりとお過ごしいただきました。

さらに今回、大学で実施するイベントとしては初めて、聖愛中学高校からも参加・協力いただきました。チアリーディング部「ＳＰＧ」は、桜をまとった宣教師館をバックに、跳躍を含めたダイナミックで明るいパフォーマンスで会場を盛り上げました。また、礼拝堂入り口に設置した聖愛中・高紹介ブースでは、中高生による案内のもと、特に甲子園に出場した野球部をはじめとする強豪部のユニフォーム展示に注目が集まりました。こうして参加いただいたことは、高大連携を進めるうえで、非常に大きな布石になりました。

特に30日はハンドベルクワイアのミニコンサートもあったことから２００名の来場者をお迎えし、４日間では合計４５０名もの方々にお越しいただきました。大変盛況であっただけでなく、学生が普段学んでいることを地域社会に発信しながら、さらに関心や専門性を深める機会となりました。そして弘前学院の１３０年を超える歴史と文化を改めて感じながら、中・高生、大学生、教職員が一丸となって新たな歴史を切り拓くイベントにもなりました。

聖愛高校SPG

外人宣教師館の展示制作・解説を行って

文学部　日本語・日本文学科四年　工藤万由子

私は学芸員資格の取得をめざしており、三年次の実習として一年間、弘前学院外人宣教師館の解説パネルの作成と特別公開を目標に調査を進めてきた。

学芸員資格履修メンバーで建物の外観、内装、弘前学院や関わりのある人物などを分担して調べることとなり、私は相沢文庫について取り上げた。相沢文庫は相沢文蔵先生のご遺族に寄贈頂いた書籍を指し、その多くが宣教師館内に収蔵されている。はじめ図書館に足を運び文献調査を行ったが彼に関する資料は少なく、相沢先生と親交のあった笹森建英先生にインタビューを依頼しパネル作成に必要な情報を集めた。パネルの作成においても何度も修正を重ね分かりやすく誤りのないものを作ることを心掛けた。実際に解説パネルを作成したことで、これまで何気なく読んでいた博物館の解説パネルに学芸員の努力があったことを実感するとともに、情報を伝達する側の責任について考える機会ともなった。

事前に準備を重ねてきた一般開放であったが、これまで解説の経験はなくどう解説すれば伝わりやすいのか、そもそも来館者が訪れるのかといった不安もあった。しかし実際には多くの来館者が解説に耳を傾けてくれた。さらには感謝の言葉をもらったり、宣教師館に関する自身の思い出を語ってくださる方もいた。また他のメンバーの解説を聞いていると話し方や話のネタなど参考にしたいものが多くあり、来館者のエピソードも合わせ解説中に新たな知識が蓄積されていった。解説中に得た知識を次の解説に活かされ、それが続いていくことに面白さを感じた。私自身学ぶことの多い四日間であったが、来館いただいた方にとってもなにか新しい学びを提供できていれば相互学習の場としても機能を果たすことができたと言えるだろう。

以前から興味はあったが初めて宣教師館に入ったという方も多かったので、今後も公開、解説を行いたいと思う。最後に宣教師館の特別公開に関わっていただいた先生をはじめとする皆さまに感謝いたします。

語学研修生からのメッセージ

ベッキー・クレーガー

弘前学院大学の夏の語学研修プログラムで色々な経験をしました。４週間弘前に住んで勉強することができました。最近アメリカではアニメやゲームなどをとおして日本の文化に興味を持っている学生が多いです。私は昔から日本に興味があったので、退職後このプログラムに参加しようと思いました。プログラムでは日本語を勉強することができます。それから、楽しい活動で日本文化の良さを知ることができます。

２０１７年のプログラムで色々なことをしました。折り紙をしたり、書道や日本舞踊を習ったりして日本の文化を感じました。それから津軽塗を作って、ネプタ村を見に行って、日本の刀の作り方も見せていただきました。そのことで東北の人たちは地域の文化に強い誇りを持っていると分かりました。しかしプログラムの中でいちばん特別なことは弘前の人たちと知り合って、友達になったことです。先生たちはやさしく教えてくださいました。毎日日本語の授業で英米文学科の学生さんたちが手伝ってくださいました。

大学の職員の方々は色々なことで手伝ってくださいました。先生と学生と一緒に、食べたり、カラオケをしたり友達になれました。ホームステイの経験で日本人の生活を見られました。ホストファミリーが青森県の素晴らしい自然を見せてくれて、温泉にも連れて行ってくれました。おいしい食べ物を作ってくれて、その作り方も教えてくれました。色々な話をしました。

弘前学院大学の夏の語学研修のプログラムはアメリカの学生たちにも日本の学生にとってもいいことだと思います。私は２０１７年のプログラムに参加できて嬉しいです。

ジョシュア・ピーターソン

弘前学院大に来たのはとてもよかったです。去年まで、私は弘前のことはわからなかった！でもいま、弘前と青森は大好き！ここで、私がたくさん友達を作れました。カラオケに行ったり、そばを作ったり、花火を見たり、友達といっしょにできたので印象にのこっています。みなさんの協力のおかけで、私の日本語はよくなりました。

いろいろな日本のことが好きだけど、いちばん好きなことはたいせつな友達を作れたこと。弘前のみなさん、ありがとうございました！しょうらい、英語の先生になりたい。そのとき、弘前に帰って、英語を教えたい！いまアメリカに帰って、日本語の勉強をがんばります。そして、弘前に帰る時、いっしょに日本語と英語を勉強しましょう！

出店ブース運営ボランティアをとおして

社会福祉学部 社会福祉学科４年　錠前　一真

今年度、初めての開催となった宣教師館特別公開イベントにおいて、私たち社会福祉学部では学生ボランティアを募り社会福祉事業所の方々と協力して出店・販売を行った。

２日間を通して、「社会福祉法人ほほえみカリフラワー」によるキーマカレー、「ＮＰＯ法人あーるど」によるワッフル・コーヒー、「ＮＰＯ法人 team. Step by step」による木工雑貨、「ＮＰＯ法人しおん障害福祉サービス事業所コミュニティカフェらみぃ」によるクッキー・コーヒー・ペーパークラフトの出店および販売のボランティアを行った。

ボランティアに際して、役割分担や活動内容など事前の打ち合わせを行い、はじめてボランティアに参加する学生の緊張や不安を和らげる取り組みを行った。実際のボランティアではテントの設営にはじまり、商品の陳列、販売、片付けなどを行った。また学生と職員の方々と協議しながら、事業者や商品の紹介ポスターなども作成した。購入頂いた方々からは「おいしかった」「いい買い物ができた」などの声を聴くことができ、２日間とも盛況のうちに終えることができた。

私は、今回のイベントは社会福祉を学ぶ学生と現場の職員や利用者の方々、そして地域住民の交流の機会であったと感じている。ボランティアを行った学生の中には、今回のイベントをきっかけにして他のボランティアや福祉に関わる課外活動に興味をもった学生も出てきている。実際に職員や利用者の方々と話ができたことで、さらに社会福祉への興味が湧き、他の活動もしたいという声も出てきている。本学が今回のイベントを契機に地域福祉について考える交流の拠点になることを期待している。

さらなる福祉専門職を目指して

大学院
社会福祉研究学科
境谷　環

大学院生となり約３ヶ月経ちました。久しぶりの授業は、座りっぱなしで窮屈ではありますが、時間が経つのが早く感じ、楽しく受けることが出来ています。

私は、国立病院機構青森病院に児童指導員として勤務し、在宅の重症心身障害児者を対象とした通所施設において、児童発達支援管理責任者の業務を行っています。世の中はノーマライゼーションが推進されていますが、重症心身障害児者へ対する受け皿は全国的に少なく、住み慣れた地域における生活のしづらさが大きな課題となっています。医療的ケアの必要性、家族の介護負担、医療・保健・教育・福祉等の関係機関の連携等、様々な課題を抱えており、その課題を研究テーマとして、大学院へ入学しました。「出来る限り、家族と自宅で暮らしたい」と願う利用者・家族に寄り添った地域生活支援が出来るよう、福祉専門職としてさらに成長出来るよう、勉強に励みたいと思っています。

43歳で入学することに不安はありましたが、双子の息子たちが今春大学へ入学を機に自宅を離れ、親子ともに新たなスタートとなり、同じ一年生の息子たちに負けないように頑張らないと、と励みになっています。

働きながら通学することに協力していただいている職場と家族へ感謝し、そしてまた高校・短大と5年間お世話になった弘前学院でまた学べることに感謝し、有意義な二年間を過ごしたいと思います。